

小学校通常学級における巡回相談の課題

鈴木 弘充^a

^a 湘北短期大学

【抄録】

小学校通常学級での1年間の巡回相談の内容を分析し、巡回相談を実施する上での留意点や課題について検討した。その結果、現状の実施方法の中では、相談員がそれぞれの分野の専門家として、教育の専門家とは別の視点から、児童や保護者の理解や関わり方について助言することが有効であると思われた。

【キーワード】

巡回相談 小学校通常学級 特別支援教育

I. 目的

近年、明確な知的発達の遅れはないが、学習・行動面で問題を持っているために教師が指導困難と考える、学習障害(LD)、注意欠陥・多動性障害(ADHD)、高機能自閉症などの軽度発達障害児の教育が課題となっている(浜谷, 2006)。また以前から、知的障害が疑われ個別的配慮が必要であるにもかかわらず、保護者の理解、同意が得られないまま通常学級に在籍し、一斉授業に適應できない児童が少なからず存在し、その対応が課題となっていた。

2007年度の制度改正によりスタートした特別支援教育は、上記の課題である通常学級における発達障害児のニーズに応じた指導・支援を目的の一つとしており、専門家による巡回相談には、重要な役割が期待されている。しかし、その実施は始

まったばかりで、地域によって方法も様々である。

本研究は、筆者による小学校での1年間の巡回相談の内容を分析し、巡回相談を実施する上での留意点や課題について考察することを目的とする。

II. 方法

2008年度中に小学校5校(A～E小学校)において行われた、各4回の巡回相談について分析し、留意点や課題について考察する。

分析の内容は、対象児の性別、学年、相談・観察の回数、相談(観察)の概要、各小学校ごとの経過の概略である。

III. 結果

(1) 各小学校ごとの相談の概要

相談は、各小学校において6月から2月までの間にそれぞれ4回行われた。1日の主な流れは、

<連絡先>

鈴木 弘充 hiro@shohoku.ac.jp

10時～10時30分頃に校長、担任、特別支援教育コーディネーターらと打ち合わせ、午前2教科の授業、給食・清掃・昼休み・午後1～2教科の授業の観察、ケース会議、となっている。

各小学校ごとに、対象児（性別、学年）、相談（観察）内容、観察・相談の回数、経過の概略を示す。

①A小学校

対象児	相談（観察）の概要	1	2	3	4
A（男，1年）	授業態度の問題・他児とのトラブル		○	○	○
B（男，1年）	発達障害・初めてのことにパニックになる	○	○	○	○
C（男，2年）	授業に集中できない・こだわり、パニックがある		○	○	○
D（女，2年）	発達全般の遅れ・特に学習の遅れ	○	○		○
E（男，2年）	授業に集中できない・学習の遅れ	○			

（概要・経過）

A児の授業態度の問題、他児とのトラブルは、同じクラスのB児の発達障害から生じる不適応行動が落ち着いてきたところに、より目立つようになり、2回目以降、相談の対象となった。

C児は、授業に参加できていなかったが（2,3回目の観察）、こだわりはあるものの、投葉により授業への集中に改善が見られた（4回目）。

D児には明らかな発達全般の遅れが見られ、特別支援学級への入級が最善と思われたが、保護者の「障害」に対する拒否的な態度が障壁となり、どう話し合っていくかが課題となっている。

この他、特定の児童ではなく、複数の児童に問題行動が見られる学級の観察、相談も行った。

②B小学校

対象児	相談（観察）の概要	1	2	3	4
A（男，1年）	授業に集中できない		○		
B（男，2年）	授業に集中できない				○
C（男，2年）	授業に集中できない・他児とのトラブル				○
D（女，2年）	場面緘黙				○
E（男，5年）	授業に集中できない・学習の遅れ			○	
F（男，4年）	授業に出ない（相談室で過ごしている）	○			
G（男，6年）	授業に出ない（相談室で過ごしている）・他児とのトラブル	○		○	
H（女，6年）	授業に出ない（保健室登校）				○

（概要・経過）

発達障害と思われるG児以外は、1回のみ観察・相談である。D児の場面緘黙やH児の保健室登校を始めとして、情緒的問題や授業・クラスへの不適応が目立った。

この他に、高学年の1クラスで、教師への反抗的態度や指示に従わないなどの、行動に問題のある複数の男児の観察を行った。

小学校通常学級における巡回相談の課題

③C小学校

対象児	相談(観察)の概要	1	2	3	4
A(男,1年)	授業に集中できない(立ち歩き)・他児とのトラブル		○		
B(男,1年)	自分の世界に入ってしまう・全体への指示が理解できない		○		
C(男,2年)	授業に集中できない・学習の遅れ		○		
D(男,2年)	学習に意欲なし・学習の遅れ		○		
E(男,2年)	授業に参加しない(立ち歩き)・生活習慣の乱れ			○	
F(女,4年)	学習の遅れ・他児からの嫌がらせ	○			
G(男,5年)	学習の遅れ・言語によるコミュニケーションの問題	○			○
H(女,5年)	学習の遅れ				○
I(男,6年)	学習に意欲なし(立ち歩き等)	○			

(概要・経過)

学習に対する意欲が見られない児童、知的な発達の遅れから一斉授業の学習についていけない児童が目立った。授業中の立ち歩きも多く見られた。

また、知的な遅れがあり来年度に特別支援学級への入級が予定されているF児、G児に対して、他児が否定的な態度で接している場面を観察した。

この他、2,4回目に、学級経営に課題を有する高学年1クラスについて観察した。

④D小学校

対象児	相談(観察)の概要	1	2	3	4
A(男,1年)	授業についていけない・他児とのトラブル		○		
B(男,3年)	授業に集中できない			○	
C(男,3年)	授業に集中できない			○	
D(男,4年)	学習に集中できない・他児とのトラブル	○	○	○	
E(男,4年)	他児とのトラブル(特にD児との)		○	○	
F(女,5年)	他児とのトラブル・発達障害の可能性			○	
G(クラス)	児童同士の関係・学級運営の問題	○	○	○	○

(概要・経過)

授業に集中できない児童、対人関係でのトラブルが目立った。F児の場合、発達障害による対人関係面の特徴から他児に非難され、突発的に攻撃的な行動をとる、とのことで、よく見られる自分の要求を通すための自ら起こすトラブルとは異なったものであった。観察でも座っている椅子を蹴られる、男子が近寄るとおびえた様子を見せるなど、集団場面での困難の深刻さが感じられた。

Gは児童個人ではなく、クラス全体の児童間、児童対教師の問題が深刻で、4回全ての巡回相談で観察・相談を行ったケースである。児童間のトラブルから、クラス全体の統率が困難になったが、クラスが落ち着くにつれ、トラブルのきっかけとなった児童に対人関係を始めとして発達全般に遅れが目立つようになった。

⑤E小学校

対象児	相談（観察）の概要	1	2	3	4
A（男，1年）	相手の気持ちがわからない・授業に参加できない	○		○	
B（男，3年）	反抗的、自分勝手な態度、他児への攻撃・嫌がらせ	○	○		○
C（男，3年）	反抗的、自分勝手な態度、他児への攻撃・嫌がらせ	○	○		○

（概要・経過）

3名について2,3回にわたって経過を観察した。A児は指示による行動の切り替えが困難であったり、一方的に脈絡なしに話す、机上をダンボールで覆って自ら視界を制限するなど、発達障害の特徴が観察され、その視点から対応の手がかりが得られた。B児、C児は共に同じような行動が観察されたが、クラスの中で互いにその行動を強め合っている様子が見られた。しかし、その要因は、観察、及びケース会議から、それぞれ異なっていることが明らかとなり、それぞれの対応についての手がかりが得られた。

(2) 5校全体を通しての傾向

小学校5校のそれぞれの巡回相談についてまとめたが、同じ市内でありながら各校の地域性を反映してか、児童の様子、相談の傾向が小学校ごとに異なっていた。しかし、5校に共通する傾向もいくつか見られた。

まず、相談の内容では、一斉授業への不適応が最も多く、他児とのトラブルを伴うケースが多く見られた。その程度に関しては、着席しているが他の事をしている、教室内を立ち歩く、別室で過ごす、など様々であった。その中でも、対象児の観察からアスペルガー症候群やADHDなどの特徴がみられ、適切な対応法をアドバイスできた例、知的障害が明らかで通常学級での学習が困難であることを確認できた例などについては、筆者の専門性を生かした相談となったが、需要の多かった学級経営に関わる問題については、経過観察するばかりで有効な相談とはならなかった。

男女比では、圧倒的に男子に関する相談が多く、対人関係の問題がある場合には、男子の場合は攻撃的行動が問題になるのに対して、女子の場合には非社会的な行動が多く見られ、トラブルに関しても他児から被害を受ける立場であることが多かった。

学年に関しては、A、E小学校で高学年の相談がなかったが、特に大きな偏りはなかった。また、E小学校以外の4校では、特定の児童ではなく、学級運営上の課題を有するクラスの観察・相談を行ったが、教師に対する反抗、拒否的態度などは、特に高学年に限らない問題であることがわかった。しかし、高学年になるほど、学級運営に対して、児童同士の人間関係が影響力を増す傾向にあり、問題の深刻さ、困難さも増していた。

各小学校共、給食の準備、給食、休み時間、清掃等の観察からは、対象児やそれ以外の児童の対人関係や行動の問題を見い出すことができ、担任に情報提供することができた。

保護者と学校の関係に関しては、児童の現状について共通認識が得られず連携に困難を有するケースが多かったが、関係が良好な場合に比べ、児童の適応状況が悪く、見通しも立ちにくかった。

IV. 考察

5つの小学校での実践を通して明らかとなった、巡回相談の実施における留意すべき点や課題について考察する。特に、佐藤（2005）が、実践を通して明らかにした巡回相談の課題を参考に検討

する。

小学校ごとに特徴が見られたことは前述の通りだが、佐藤（2005）は、訪問する専門家に求められる課題として、「学校文化に根ざした支援」を挙げ、巡回相談を行う上で、まずは学校文化を理解することが必要であると述べている。「文化」とはいえないかもしれないが、今回の巡回でも私立中学進学が盛んな小学校と郡部の小規模校では雰囲気の違い、児童達の情緒面にも影響を与えているように思われた。

また、担任そのものや担任の指導、さらに児童集団が、授業中や学級活動中の児童の態度、行動に大きな影響を与えている様子が観察されたが、佐藤（2005）は、そのような要因を担任の力量に還元させるのではなく、学級環境のアセスメントの視点を持つ必要があると述べている。そして、落ち着いて安心してすごせる学級の要件として、①児童と担任との信頼関係、②児童同士のつながり、③学習・生活規律の確立、④「できた・分かった」実感のもてる授業、⑤授業や学級経営に「見通し」やそこに向かってがんばれる「向かう先」がある、の5つを挙げている。児童が落ち着いて集中して課題に取り組める環境を検討する上で、重要な観点であると思われる。

相談員と教員の関係に関しては、「互いの専門性をもとに対等に意見を出し、共同して問題を解決する（浜谷，2006）」、「互いの役割を尊重しつつ、自らの仕事に誇りをもって対話する（佐藤，2005）」関係が理想とされているが、実際には、相談員の「専門家」としての意見を教員が受動的に聞く姿勢が強くなる場合が多いことが課題として挙げられている。しかし、浜谷（2006）も指摘した通り、時間的制約の中で「共同的」になることは困難であり、今回の実践を通して、むしろ、時間的制約の中で適切かつ具体的な助言がどれだけできるかが、今後の課題であると感じられた。

現状の巡回相談においては、相談員がそれぞれの分野の専門家として、教育の専門家とは別の視点から、児童や保護者の理解や関わり方について助言することが有効と思われる。

文献

- 1) 浜谷直人（2006）：小学校通常学級における巡回相談による軽度発達障害児等の教育実践への支援モデル. 教育心理学研究, 54, 395-407.
- 2) 佐藤 暁（2005）：巡回相談の現状と課題. 季刊発達, 103, 59-66.

A Study on the Improvement of Itinerant Consultation in Inclusive Elementary Schools

SUZUKI Hiromitsu

[abstract]

The purpose of this paper is to investigate the problems of itinerant consultation in inclusive elementary schools. Under the present circumstances, we will find it effective for the consultants to give some advice to understand children and their parents or how to make some relationship with them. The point is that this advice should not be made from the viewpoint of the educationist, but that of an expert in other study fields.

[key words]

itinerant consultation, inclusive elementary school, special needs education